『万葉集』から見る日本の古典 23

獨協大学特任教授　城崎　陽子

壬申の乱 ―その2―

先回は天智天皇の崩御による近江朝の終焉と、それに続く壬申の乱を取り上げた。今回は、壬申の乱が近江朝廷側の敗退で幕を閉じ、飛鳥浄御原宮で天武天皇が即位し、律令国家体制がいよいよ進められたことを取り上げる。

天武天皇元年(六七二)六月二十七日には大海人皇子みずからも不破に移り、野上(岐阜県不破郡関ヶ原町野上)に本営をおき、七月二日には数万の兵のうち、一隊を伊勢から大和へ、一隊を不破から直接近江に進攻させた。一方大和では、病気を理由に引きこもっていた大伴馬来田・吹負兄弟たちが参戦した。そして、馬来田は大海人皇子のもとに仕え、吹負は大和に留まって激戦の指揮に当たった。

攻防がくり返されるなか、七月二十二日、近江の瀬田で決戦のときを迎え、近江方は敗退、大友皇子は逃げ場を失い山前の地(京都府乙訓郡大山崎村か)で自害して果てた。左大臣の蘇我赤兄や右大臣の中臣金ら臣下の者たちも散り散りとなり、大友皇子に従っていたのは物部麻呂ら一、二の舎人に過ぎなかった。

ちなみに、時代は下って天保四年(一八三三)に刊行された尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』の中には、大友皇子の最期について次のように記されている。

大友皇子今はせん方なくて落ち行き給ひしかど、落ちつき給ふべき所なければ隠山に入りて、みづから縊れて薨じ給へり。臨終に詩を賦して宣はく、

金烏臨ニ西舎一　鼓声催ニ短命一
泉路無ニ賓主一　此夕誰家向

この詩の心は金烏は日の事にて、西舎は西の宿りと読みて日影の西の空にかたふく事なり。鼓声短命を催すとは軍破れて攻め鼓の声が、我が今はの命を催すやうに聞こゆる由なり。泉路はよみぢと読みて冥途の事なり。賓は客、主はあるじなり。これより冥途におもむくに主客の分ちもあるまじきに、この夕誰が家に向ひて行かんと作らせ給へるなり。

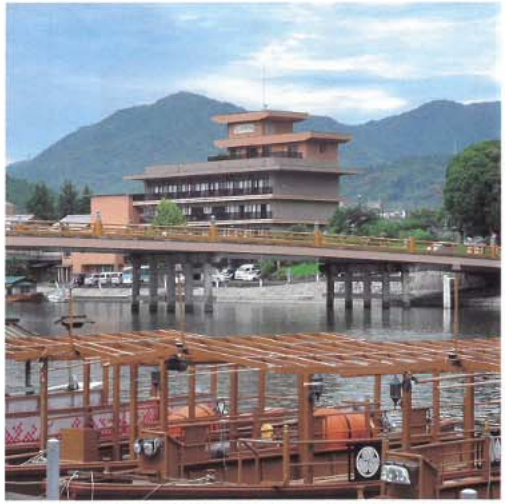
行きどころのなくなった大友皇子は、山に入り、自らの命を断ったとされているが、この時、詠んだとされる漢詩が、実は後に謀反を疑われて処刑された大津皇子が臨終に臨んで詠った詩であると『懐風藻』(天平勝宝三年〈七五一〉撰)には記される。『百人一首一夕話』は作者やその周縁のエピソードなどを丹念に拾った百人一首の注釈書であるが、およそ一千年ほど経つ間に、「悲劇の皇子」の伝承は混同してしまったらしい。

壬申の乱は挙兵からおよそ一か月で大海人皇子方の勝利で終わった。大海人皇子は飛鳥浄御原宮で即位し、天武天皇となり、服制の改定や八色の姓の制定、冠位制度の改定などを行い、さらに中央集権化を進めていったのである。

『万葉集』には、天武天皇が壬申の乱に際して詠ったとされる歌が残されている。

天皇の御製歌

み吉野の　耳我の嶺に　時なくそ　雪は降りける　間なくそ　雨は降りける　その雪の



壬申の乱の決戦地となった瀬田の唐橋

時なきがごと　その雨の　間なきがごとく　隈も落ちず　思ひつつぞ来し　その山道を

(巻一・二五番歌)

或本の歌

み吉野の　耳我の山に　時じくそ　雪は降るといふ　間なくそ　雨は降るといふ　その雪の　時じきがごと　その雨の　間なきがごとく　隈も落ちず　思ひつつぞ来し　その山道を

右、句々相換れり。これに因りて重ねて載せたり。

(巻一・二六番歌)

吉野の耳我の嶺に絶え間なく降る雪や雨の中を、道を曲がるごとに物思いを重ねながらやってきたという当該の歌は、壬申の乱直前の大海人皇子の不安な様子や心中の様子を伝える一首とされており、「或本」と呼ばれる別本にも載せられるほど人口に膾炙した歌であった。こうした不安に苛まれる時期を通過して、いよいよ自らが天皇となった時、思い返すのは壬申の乱において打ち破った甥の大友皇子の事だったのかもしれない。天武天皇は吉野において天智の子を含めた六人の皇子に「六皇子の盟約」と呼ばれる誓いを立てさせるのである。天武天皇八年(六七九)五月六日の事であった。

乙酉(六日)に、天皇、皇后と草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河島皇子・忍壁皇子・芝基皇子に詔して曰はく、「朕。今日、汝等と倶に庭に盟ひて、千歳の後に、事無からしめむと欲す。奈之何。」とのたまふ。皇子等、共に対へて曰さく、「理実、灼然なり」とまをす。則ち草壁皇子尊、先づ進みて盟ひて曰さく、「天神地祇と天皇、証めたまへ。吾、兄弟長幼、并せて十余王、各異腹より出でたり。然れども同じきと異れると別かず、倶に天皇の勅の随に、相扶けて忤ふること無けむ。若し今より以後、此の盟の如くにあらずは、身命亡び子孫絶えむ。忘れじ、失たじ」とまをす。五皇子、次を以ちて相盟ふこと、先の如し。然して後に、天皇の曰はく、「朕が男等、各異腹にして生まれたり。然ども今し一母同産の如くに慈まむ」とのたまふ。則ち襟を披き其の六皇子を抱きたまふ。因りて盟ひて曰はく、「若し茲の盟に違はば、忽に朕が身を亡はむ」とのたまふ。皇后の盟ひたまふこと、且天皇の如し。

この記事をみると、天武天皇は今後「事無」きように兄弟の長幼や出自は各々違ってはいても、天皇のもとで力を合わせていくことを誓わせたことがわかる。もしも盟約を破ることがあったならば、その身はたちまちに亡ぶであろうとされていることから、盟約そのものの重みがうかがえる。この盟約に際してのことであろう、天武天皇は次のような歌を残している。

天皇、吉野宮に幸しし時の御製歌

淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見

(巻一・二七番歌)

紀に曰はく、八年己卯五月庚辰朔甲申、吉野宮に幸すといへり。

立派な人が良いところとしてよく見て、「よし!」と言った。この吉野をよく見るがいい、立派な人も良く見たことだ、という一首の歌には「よし」という言葉が八回も登場する。ダジャレを重ねたような歌であるが、六皇子の盟約を終えた天武天皇のよろこびがうかがえるようである。

柴燈大護摩供御壇木 特別志納御案内

當山では毎年三月第二日曜日に、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓において盛大に執り行われます。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させて戴きます。

御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

TEL〇四二-六六一-二一五